



晴瞬祭 3年写真



晴瞬祭 全校写真

PTA機関誌 わかつら 目次

「PTA活動について」

PTA会長

大塚 勇人

1

「ペンキ画家SHOGENさん」

校長

鈴木 俊治

2

「学校行事を通じて感じたこと」

一年学年委員長

眞下 博巳

3

「変化」

二年学年委員長

濱尾 純

3

「学校行事を通して感じたこと」

三年学年委員長

森山 京子

4

「誰もが自分の言葉で語れる若浦中学校」

教頭

中村 一也

4

「若浦中学校での学びについて」

小林 宗介

5

「若浦中学校から学ぶ新しい発想」

萱原 拓己

5

「オレンジ色の学校Ⅱ若浦中学校」

高橋 紀子

6

「中学校三年間で培った財産」

田畑夏々生

6

写真集

晴瞬祭（体育祭）

英雄祭（学習発表会）

……

10.

写真集

一年生・二年生・三年生

……

19.

行事の感想・主張など

「生徒会活動を通して」

三年 有馬 隆太

……

12.

「学生語り部を通して学んだこと」

三年 泉 優花

……

12.

「晴瞬祭での学び」

三年 山崎 陽摩

……

13.

「英雄祭で学んだこと」

三年 阪本 結優

……

14.

「一年の探究学習」

一年 西田 奏良

……

15.

「二年探究での学び」

二年 材木 佐江

……

15.

「総合学習での成長」

三年 酒井 遙加

……

16.

「部活動を通して学んだこと」

三年 富永 結芽

……

16.

「日本の宝を守る」

三年 齋藤 悠陽

……

17.



PTA活動について

PTA会長 大塚 勇人

まず初めに、未熟ながらPTA活動を通じて様々な経験を
得る機会をいただき、とても充実した一年間となりました
こと、誠に感謝申し上げます。

PTA活動について、私個人の意見や感じたことには
なりますが、お話しさせていただきます。活動に携わる
中で人前に出ることや少なからず発言の場があり、遠方
での講演会への参加、活動日の日程調整など確かに苦労
する場面はありましたが、目的や活動内容についての重
要性を深く知るためのより良い時間となりました。

目的は保護者・大人の立場として子どもたちを支え守
る事であると感じています。また、学校を通じて先生方
や地域の方々からの支援や協力を得るためでもあります。
活動内容は主に子どもたちと寄り添える立場であれる
ように、保護者も学び・成長の場を必要とするというこ
と。そのため、講習会、講演会、会議などへの参加を行
います。

今後のPTA活動の在り方につきましては、あくまでも
願いにはなりますが、裏方として、子どもたちの自主

性を最大限サポート出来る立場として、多くの方々との
連携を取ることと安心して過ごしやすい環境作りや、地
域の活性化へと繋がるために何らかの形で貢献できれば
と思っています。

最後に、たくさんの子どもたちの笑顔溢れる姿に出会
えてとても嬉しかったです。本当にありがとうございます
でした。

ペンキ画家SHOGENさん

校長 鈴木 俊治

SHOGENさん（京都府瑞穂町出身）に、令和六年十二月十一日に来校いただきました。

SHOGENさんは、アフリカのティンガティンガアートに魅了され、タンザニアで修行を積んだ唯一の日本人ペンキ画家です。作品は鮮やかな色彩と生き生きとした動植物を特徴とし、「人々を幸せにする絵」を描くことを目指しておられます。全国の学校を訪問し、子どもたちと一緒にペンキアートを制作する活動を行っておられ、子どもたちがアートを通じて自己表現し、自己有用感を高めることを目指しておられます。

SHOGENさんはこの三年間で全国三百校ほどを訪問されたそうです。若浦中で指導の最中（生徒がペンキアート作成中）は、絶えず「この色使いすてきですね！」「このキャラクター好きや！」等、常に子どもたちを認め、励ます言葉掛けをされていました。出来上がった作品は校内に掲示します。製作活動や作品の効果をお聞きすると、学校でありのままの自分を表現し、それが認められることで子どもたちの自己決定力・自己有用感・共

感的な理解が高まるそうで、特に学校で落ち着きがなく教室に入りにくい子や毎日の学校への登校に困難を感じる子に効果があるそうです。お話を聞き、若浦中学校でも方法は異なりますが同じことを目指しているのではないのかと気付かされました。指導後にSHOGENさんから「若浦中学校の生徒はとても個性的な色使いができます。」と評価いただきました。それを大事にして今後も「生徒一人ひとりの個性が輝き、自分が学校で大切な一人で、自分の学校を大事に思える」学校づくりをしてまいります。

引き続き保護者の皆様・地域の皆様の本校の教育活動へのご理解・ご協力をよろしくお願いいたします。

学校行事を通じて感じたこと

一年学年委員長 眞下 博巳

保護者の皆様、一年間PTA活動にご協力いただき、ありがとうございました。私も、学級委員長として役員をさせていただき、あつという間の一年間でした。

六月二十三日には、若浦中学校で、親子混合ドッジボールを行いました。初めての役員で何から手を付けて良いか分からず、いろいろ大変な面もありましたが、特に先生方や他の役員さん、保護者の皆さんにはご協力をいただき、怪我無く無事に終わることができました。多くの保護者の方々に参加していただき、楽しくできたことを大変感謝しています。

多感な年頃の子どもたちが健やかな学校生活を送るには先生方と保護者との連携が必要です。保護者の皆様には引き続きPTA活動へのご協力をお願いします。

私も保護者の一員として、この学校がますます活力溢れる学校になることを願います。

変化

二年学年委員長 瀨尾 純

私たちが中学生だった頃は、先輩は一目置かれた存在であり後輩は関係がなければ関わる機会も少なかった。体育祭や文化祭では、団結し協力し合うことはあったが、殆どの事柄は教員や生徒会の生徒が決定していたように記憶している。そんな記憶の中で我が子が送っている中学校生活は、遥かに違うものである。毎日の生活の中で当たり前のようにプレゼンが行われ、自分の考えを様々な人に伝え、他者の考えを知る機会があり、行事では自分たちで全てをプランニングし、教員の手を借りず堂々と自信をもって行動する姿には、私の頃と比較しても「今の子どもたちは凄いな」と感心させられることばかりだ。何事にも意欲を持って真剣に取り組み楽しむことは、人生を豊かにするための肥やしとなる。これから子どもたちには恐れず様々なことにチャレンジしてもらいたい。そして是非とも、人生を謳歌してもらいたい。

学校行事を通して感じたこと

三年学年委員長 森山 京子

新しい制服に身を包み若浦中学校に入学したのがついこの前の様に感じます。あつという間に過ぎた三年間。しかしこの三年間は子どもたちにとって仲間と共に学び、様々なことに挑戦し続けた特別で掛け替えのない日々だったと思います。

特に、生徒の主体性を尊重し、一年を通して行事の運営や当日の進行などを子どもたちで実施する取り組みは、これまでにない大きな挑戦だと思いました。例えば今年の英雄祭では、恒例の「全校合唱」や「クラス合唱」の他に新しく「有志の発表」があり、手品や劇などを披露し、ステージで活躍する子どもたちに大きな感動と成長を感じました。

このような取り組みの根底には、先生方や関係者の皆さんの見守りと支えがあつてのことだと思います。これからも若浦中学校が子どもたちの主体性を活かせる環境であつて欲しいと願っています。本当にありがとうございます。

誰もが自分の言葉で語れる若浦中学校

教頭 中村 一也

若浦中学校に赴任してすぐに行われた着任式。校長室まで生徒が式の流れを説明に来てくれました。「着任式で一言お願いします。」と依頼されたので、「若浦中学校のことを知らないのです、式では先生から生徒のみんなに質問をしてもいい？」と聞くと、「大丈夫です！誰に聞いてもらっても。」と頼もしい返事が返ってきました。「誰かが」ではなく「誰もが」自分の通っている若浦中学校について自分の言葉で語ることができる、という自信を持っているからこそその返事でした。晴瞬祭や英雄祭といった行事、総合的な学習の時間の探究活動、授業研究会への参加、生徒会主催の研究発表会等、学校生活のあらゆる場所で生徒が主体となって活動していることがこの自信の源になっていると、この一年を振り返って実感しています。若浦中学校が大切にしている「当事者意識」をこれからも生徒が持ち続けられるよう、生徒を信頼し、生徒主体の学校づくりに努めてまいります。

若浦中学校での学びについて

小林 宗介

この一年を振り返って、若浦中学校の生徒たちの成長と努力に感動しました。特に、授業では生徒たちが主体的に学び、自ら考え意見を発表する姿が印象的でした。課題に対し生徒たちは互いに協力し合いながら問題解決に取り組み、自分たちの意見をしっかりと持つことの大切さを学んでいました。

また、部活動や学校行事でも生徒たちの頑張りが光っていました。晴瞬祭・英雄祭では、生徒たちが運営し自主的に役割を分担し、協力して一つの目標に向かって努力する姿に感動しました。自分たちのアイデアを形にするために一生懸命取り組み、その成果を見事に発揮していました。

この一年間、生徒たちの成長を間近で見守ることができたことは、私にとって大きな喜びでした。生徒たちの努力と主体性を育むのに関わることができたことを誇りに思います。これからも生徒たちの成長を支え、可能性を引き出す教育を続けていきたいと思っています。

若浦中学校から学ぶ新しい発想

萱原 拓己

令和六年四月、私はいろんな学校で教員生活を過ごし、若浦中学校に赴任しました。着任式の時、私は自身を迎え入れてくれた光景に目を疑いました。生徒が司会・運営をする着任式です。今までにこんな着任式を経験したことはありませんでした。若浦中学校で過ごしていく中で、私があの時衝撃を受けたことはほんの序章に過ぎないのだと感じるようになりました。わくわくタイム・晴瞬祭・英雄祭・研究発表会など、中学生の力ってこんなに可能性を秘めているのだと驚きました。若浦中学校の生徒たちは私に本当に多くのことを教えてくれました。仲間と共に学ぶ姿などの日々の生徒の様子が私自身の授業づくりのヒントにもなってくれました。生徒が自ら考え行動するためには、教師側の考えも変える必要がある、そんな大切なことに気づかせてくれた素敵な学校です。これからもこの学校での学びを生徒に返していきたいと思っています。

オレンジ色の学校Ⅱ若浦中学校

高橋 紀子

十二月五日、昨日「未来について語り合う会」が終了しました。着任して三か月余り経過しましたが、この間私が感じてきた印象はオレンジ色の学校Ⅱ若浦中学校です。

まず、温かい生徒。優しい声掛けやホッとする空気に溢れています。そこにいる人をさりげなく応援する気持ちや、困っていることに気付ける心を感じます。

次に、皆で一つのものを目指す情熱。晴瞬祭や英雄祭で見たチームワーク。最後は学年を越えて学校全体「オール若浦」で取り組む熱量。

そして、なんといっても「未来について語り合える学校」です。きっと中学生の心は揺れています。それでも自分を語ったり、伝えたりできることはとても素敵なことです。自分の「今」を見つめて、自分の言葉で誰かの前で語ることは、とても勇気のいることです。それが挑戦できる場Ⅱ若浦中学校です。

三階の廊下からは、今日もオレンジ色の夕日が海に映っています。誇らしい。

中学校三年間で培った財産

田畑 夏々生

若浦中学校には、産休に入られる先生に代わり、十一月から養護教諭として着任しました。私自身も子どもの出産・育児のため四年間お休みをいただいており、中学校に勤務するのは久しぶりです。若浦中学校の皆さんに会えるのを楽しみにしていました。

着任してすぐにあった英雄祭では、素晴らしい合唱と有志の発表。そして十二月の研究発表会では、主体的に学んで行動し、自らの思いを語り合う生徒たちの姿を見せてもらい、「こんなことを中学生ができるの？」と驚きを隠せませんでした。

中学校生活の中では、色々な人と関わり、経験し、たくさんの感情が生まれると思います。楽しいこと、嬉しいことだけではなく、辛いこと、悲しいこともあるかもしれません。そんな中で培った『主体性』は、一生の財産になると思います。

これからも、皆さんの心と身体のサポートをさせてもらいながら、活躍を近くで見守らせてもらいたいと思いますので、よろしく願います。

晴 瞬 祭









英雄祭





生徒会活動を通して

三年 有馬 隆太

これまで四期連続で生徒会を務めてきたが、学校が大きく変わるには「生徒会が変わらなければならない」と気づくことができた。生徒にとって身近な例を挙げるなら「Agency（エージェンシー）は生徒会から広がっている」ということだ。これまでの生徒会では役割を分担するということができなかった。当時は Agency が成長していなかったため、自分の役割を全うすることができなかった。そのため、組織内でも仕事を沢山しなければならぬ人とならぬ人という差ができてしまった。

しかし、今は Agency も成長し、互いに信頼関係も築けているため、役割を分担して行うことができている。

生徒会の成長は自然と学校に還元されるもので、クラスが変わり、学校が変わる。つまり、生徒会が生徒の模範的存在になっているということである。

これからも本校のモットーである「生徒が創る学校」を追求し、生徒にとって最高の学校を実現して欲しい。

学生語り部を通して学んだこと

三年 泉 優花

私が学生語り部をして学んだことは、歴史を継いでいくことの大切さだ。語り部の活動はたくさんあるが、その中でも主となる館内案内や交流活動ではより強く実感した。交流活動では、実際の経験者の方からの話を聞く機会があった。そのときに、学生語り部へ感謝もされ、実際のお話を聞くこともできた。経験者の高齢化が進み、直接お話を聞く機会も減っている中、語り継いでいくべき存在は語り部だと再認識することができた。しかし、まだ全員が知っている歴史か、と聞かれればそうではないだろう。経験者の方との交流だけではなく、関西学院大学の生徒さんとの交流などたくさんの人と交流の機会を設けてもらっている。そこでする館内案内や、グループでの交流などでその歴史を交流していくことで、歴史を守り継いでいくことに繋がると思う。だから、これからこれらの活動に積極的に参加し、後世にこの歴史を継いでいきたい。

晴瞬祭での学び

三年 山崎 陽摩

「限界を決めず今までで一番の演技を創り上げる。」

これは演技リーダー全員が共通目標にした今年の演技のあり方です。この目標を達成するべく、日頃の練習の中で演技リーダー全員が切磋琢磨して努力を積み重ねてきました。しかし、切磋琢磨していたとしても上手くいかないことや思い悩むことも沢山ありました。また「なぜこのようなミスをしてしまったのだろう。」「もっと自分がしっかりしていればよかったのではないか。」と自分との葛藤で情けなく思えることも沢山ありました。けれど、大変な経験をしたからこそ、本番で得られるものは大きい。そう信じて一回一回の練習を大切にし、より素晴らしい演技をつくろうと努力を積み重ねました。その結果として今まで練習やりハーサルをしてきた演技の中で一番のものを本番で出せたと思います。

この晴瞬祭の取り組み期間中は、三年間の中で一番キツく苦しかった期間でしたが、全員で協力し何かを成功させる嬉しさ、最後まで物事をやり遂げる達成感などが養われました。結果的に僕は晴瞬祭の演技リーダーにな

ってとても良かったと思います。これからも晴瞬祭で培った力を今後に活かし、より良いものをつくっていきます。

英雄祭で学んだこと

三年 阪本 結優

私は英雄祭実行委員長を務めて様々な視点を持って考えることが大切だと改めて感じました。

今回の英雄祭は新しいことを始めたことが多くあった中で一番大きかったのは『燃唱祭』から『英雄祭』へ改名したことです。一度改名してからまだ二年しか経っていません。そんな中、改名することは良いと思う人と悪いと思う人がいると思います。だから先生たちに賛成してもらっても生徒はどう思うのかについて考えました。前の名称には合唱というイメージが大きかったので今回は英雄祭の中身全部で共通する思いを込めました。その思いを込める中、全員納得を目指しこの英雄祭となりました。

名称変更以外にも新しく始めたことがあります。それはヒロフェスというもので、全校生徒の中から代表で得意なことや劇などを披露するというものです。しかしアンケートをとった際、立候補をしてくれたのはごくわずかでした。有志を始めるきっかけとなったのは、高校のような文化祭にしたいという意見が三年生の中で挙がっ

たことです。ここでヒロフェス開催を諦めてしまうと三年生の思いが届かなかったこととなります。全員の意見を尊重するためステージの上で披露する人、そしてそれを見る人それぞれが面白いと思えるヒロフェスを作るための工夫について考えました。一人が納得する意見ではなく全員が納得する意見を取り入れてヒロフェスを行なって良かったと思う人が増えるように視点を一つに絞らず周りにも広げて考えることが多くなったと思います。

このように今回新しいことを進める中で様々な視点を持つことを一番大切にしてきました。自分が良くても相手は嫌だと思っているかもしれない。そんな相手を考える気持ちをたくさんの人に広げ、これから生活していきたいと思います。

一年の探究学習

一年 西田 奏良

一年の探究学習では、最初に引揚記念館にどのようなすれば人が集まるのかを、グループに分かれて考えました。その中で「アンケートを取ってみる」や「食べ物を作ってみては」などの案が出ました。その案について調べ、実践をしました。そのことを踏まえ、実際に引揚記念館の人たちに発表をしました。ここで最初の探究学習は終わりました。

次にグループで舞鶴の特徴を挙げ、良いところをもっと伸ばすにはどのようにすればいいのか、悪いことを改善するにはどうしたらいいのかを考えました。その後、考えたことを深く調べていきました。例えば、大浦で有名な大浦みかんを使ったケーキを出してみようと発案するグループもいれば、舞鶴の外来種について調べ、それを環境に負荷なく駆除するにはどうすればいいのかを考えるグループもいました。

これからもっと深く調べ実践することで、舞鶴がより良くなるように取り組んでいきます。

二年探究での学び

二年 材木 佐江

私は、探究活動を通して今後自分たちがどうしていくべきかを考えることができました。私たちのクラスでは、同じ目標を持つメンバー同士で集まって、自分達の調べたいことを探究し深めていきました。

私たちのグループでは、オリジナルキャラクターやグッズを作成・販売して舞鶴をPRしました。校外学習では、実際にご当地グッズの制作・出荷を行なっている会社にお邪魔しました。物を販売することの大変さを学び、探究活動をしていく上で、自分は何をすべきなのか、どうすれば多くの人に買ってもらえるか学ぶことができました。

職場体験では校外学習で学んだことを活かし、グッズの変更や、呼び込みなど様々な工夫を凝らして多くのグッズを販売することができました。

これらの探究活動を通して、自分を見つめ直す力や、自分たち学生の力で舞鶴にどんなことができるのかを知りました。これらの力を活かし、自分と今後行うであろう探究活動のために努力していきます。

総合学習での成長

三年 酒井 遙加

三年生の総合学習では自分が気になることをテーマにして追究する個人探究を行っています。

そこで私はクラスメイトと協力することの大切さを学びました。探究しているものは違っていても、人と協力しアドバイスを出し合ったり、アンケートに答えあったりすることで自分の考えを深め合うことができました。また、より良くするために頑張る力や自分で考える力が身につきました。岩崎教授や、和田中学校の生徒、先生に向けての発表、研究発表会など、たくさんの発表を通してどうすればもっと分かりやすく伝えることができるだろうと考え、行動することでこれらの力が身につきました。

私はこのように総合学習を通してたくさんの力をつけ、成長することができました。これらの身につけた力は、新しい挑戦や取り組みにおいて非常に重要なものになると思います。そのため、これらの力を探究以外の場面でも活かし、更なる成長をしていきたいです。

部活動を通して学んだこと

三年 富永 結芽

私はソフトテニス部に所属し、部長という立場で活動してきました。私はこの部活動を通して二つのことを学びました。

一つ目は、人との繋がりについてです。部活は自分一人で練習することができません。コート内で指摘し合えるペアやアドバイスをくれる顧問の先生方がいるから、雰囲気高め合えるのだと感じました。また、練習試合などの機会を通して他校の選手や先生方への礼儀やマナーを学び、チームの目標としていた、人との繋がりを改めて学ぶことができました。

二つ目は周りを見る力です。これまで先輩や顧問の先生方に頼っていた分、自分が部長という立場に責任を持って活動することができました。練習においても、チームに合った練習や話し合いを考え、一人ひとり意見を持ちやすい部活動の雰囲気を作り上げることができました。この二年半の経験をこれからも活かし、伸ばしていきたいと感じました。

日本の宝を守る

三年 齋藤 悠陽

相撲、有田焼、年賀状。日本にはさまざまな美しい文化が存在する。私たちは今まで文化に魅了され、ふれあい生きてきた。人を惹きつける力のある日本の文化はまさに日本の宝である。

しかし、現在、日本は宝を失う危機に直面している。多くの文化がさまざまな問題を抱え、衰退しかけているのだ。私はこの事実に関心を持ち、改善したい。いや、しなければならなかった。

なぜ日本の文化は衰退しているのだろうか、現状を打破するために原因から探ることにした。

有田焼や南部鉄器などの、伝統工芸品。東北の青森ねぶた祭などの、日本の祭りは主に少子高齢化による後継者不足が原因となっていることが分かった。したがって、現状は、その美しい技術を引き継ぐ若者が少なく、高齢者の方が主体となって文化を継承している。だが、この状態ではいつか必ず限界が来てしまう。そうなれば、日本の宝は人々の記憶と共に失われてしまうだろう。

さらに調査していくと需要の減少も原因となっていた。

例えば年賀状。最近はスマホの連絡アプリで済ましてしまう人が続出し、深刻な「年賀状離れ」が進んでいる。実際、私の身の回りの人のほとんどは連絡アプリで済ませている。確かに連絡アプリはとても便利だ。しかし、本当に気持ちは伝わるのだろうか。年賀状の行書で書かれた名前、手書きで書かれた挨拶。これら全てに想いがこもっており、自然と暖かさを感じる。その暖かさこそが、人と人を繋ぐ。まさに架け橋とも言えるだろう。

では、どうすれば日本の宝を守ることが出来るのだろうか。私は日本の若者に関心を持たせることが大切であると考えている。私自身もまだまだ知らない文化は多くある。だからこそ、日本の文化の美しさ、継承する必要性を発信し、若年層にまずは知ってもらう。その先に技術の継承が存在すると私は考えた。さらに、私たちは現状に危機感をもたなければならない。自分たちの文化はいかに美しく、数多くの人を楽しませているかということとを自覚した上で、問題解決に向け取り組む。そうすれば、宝を守る大きな盾となれるかも知れない。

私の町にも祭りがある。その地域独特の個性があり、一年に一度、文化に参加することは私の楽しみでもあり、町の人の誇りでもある。だが、このかけがえのない文化

も後継者不足に悩まされている。私は町の一人として、何とか出来ることをしていきたい。例えば、地元のアピールをすることである。ネットを駆使してより多くの人に来てもらう。そうすれば、祭りについて関心を持つ人を増やすことができる。このようにまずは身近な宝から守りたい。また、最近では、文化だけでなく漁業や農業を営む人も徐々に減ってきている。どの仕事も私達が生きていくために必要不可欠な存在だ。そのため、自分のできることを考え、どんなに些細なことでも実行に移していく。それも、日本の文化を守る一つの手段となるだろう。

人を惹きつけ、魅了する。時には国境すらも超えて親しまれている日本の文化。それはまさに宝。私達は一人の日本人として文化を守りたいという意識を持って生活するべきだ。もし、国民の全員が文化に興味を持ち、行動した時、文化の宝としての価値が再認識されると同時にさらに向上していくと信じている。そして、わかってほしい、自分で踏み出す一歩こそが宝を守る鍵へと変化するということを。

一年生





— — 年 生





三年生

